

2022 年度 自己点検・評価報告書

国際教養学部

2023 年 2 月

基準4 教育課程・学習成果

2023年度カリキュラム改訂を予定している学部・研究科については、下記の内容について記入ください。

- ・ 授与する学位ごとに、学位授与方針を適切に定めているか。
- ・ 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を適切に定めているか。
- ・ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

2023年度にカリキュラム改訂を行わない場合は、下記の内容について記入ください。

- ・ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

【1】2021年度の自己点検・評価で課題となった事項

① 学位授与方針 (DP)、カリキュラムポリシー (CP) の学生への周知

2021年度より春学期、秋学期のオリエンテーションの機会を活用して、学部長から学位授与方針 (DP) とカリキュラムポリシー (CP) の内容について伝えてきた。オリエンテーションに参加した1-2年生については一定の効果はあったといえる。しかし学部提供科目一つ一つが、どのようにDP、CPに結びついているかオリエンテーションとともに各授業での教員からの周知が望ましい。

② コロナ禍における1セメスターの必修海外留学への対応

2021年4月に入学した7期生は、当初予定していた1年次修了時の1セメスターの必修留学を実施することができず、2年次秋学期にオンラインで履修する学生と、3年次春学期での現地留学という2つのオプションを提示することとなった。また2021年4月に入学した8期生は、2年次秋学期へと変更することとなった。中期的な改善計画としては、このような不測な事態に備え、学部執行部と派遣教育機関との連携を密にしながら臨機応変に対応できる体制強化をしていく必要がある。

③ カリキュラムツリーの提示

現行のカリキュラムをもとに、入学時から卒業時までの段階的な学びを提示したものを来年度の履修要項に提示していく必要がある。また在籍生または卒業生の履修科目等の事例をHP等に掲載していく。2023年度導入の新カリキュラムの策定においても、同様のカリキュラムツリーを作成して、履修要項や学部HPに掲載する。

④ 卒業要件である英語スコアの達成

卒業要件としてTOEFLiBT80以上の取得が卒業要件として設定しているが、様々な入試形態で入学するため、他学部と比べるとプレースメントテストでは相対的に高い得点を取得しているが、同時にばらつきが大変大きいことが特徴として挙げられる。そして3年次のSeminar履修要件、Junior Paper提出時の英語要件を満たしていない学生が多い。上位層は問題ないが、下位層の学生が目標を達成できるようなロードマップの提示が必要である。

⑤ 2023年度カリキュラム改訂

2023年度に導入される新カリキュラムの検討委員を学部長が任命し、検討委員会で改訂案を協議し、教授会で審議をおこなっていく。

⑥ 外国人学生を対象とした日本語プログラム

本年度は2018年度から導入した日本語カリキュラムの履修生が卒業をする。彼らの履修状況、日本語能力の伸びについて確認し、学生自治会でプログラム履修者の学生にヒアリングをしていく。

⑦ 海外大学院進学の見学相談

学部開設以来、国内外の大学院進学を希望する学生が毎年数名おり、入学時の段階から進路相談に対応する窓口がない。

⑧ 国際教養学部学生による進路相談

3年次秋学期に300-400番代の学部専門科目の履修が多い本学部では、就活への取り組みに違いがある。卒業生が、どのように本学部の強みを活かしてきたかアドバイスをもらう機会を検討したい。

【2】2022年度の方針・改善計画（および中期的な改善計画）

<方針・改善計画>

① 学位授与方針の学生への周知の必要性

学部1, 2年生を対象に行われるオリエンテーションでは学部長による教育目標、学位授与方針、カリキュラムポリシーの説明をおこなっている。新カリキュラムで提供する各教科は、4つの学位授与方針とカリキュラムポリシーに連動しているため、4年間の学びを提示した見取り図をオリエンテーションの折に丁寧に学部長が説明していく。今後はオリエンテーションを行う教室の外にパネル展示を行い、学生の理解度を深めていく。また各クラスでも最初の授業のなかで、担当教員が、担当している科目が学位授与方針のなかで、どの位置にいるのかについて明らかにすることにする。

② コロナ等、不測な事態への対応の必要性

2020年4月に入学した7期生は、3年次春学期での現地留学を期待していたが、コロナの影響で、春学期もQTUとオークランド大学のオンライン留学という形式となった。2021年4月に入学した8期生は、2年次秋学期より南カリフォルニア大学、サイモンフレーザー大学、グリフィス大学3大学への海外留学の実施が可能となった。7期生については13名の学生が3年次秋 semester の留学を選択した。中期的な改善計画としては、本来の派遣大学であるアテネオデマニラ大学への現地留学の再開を期する。今後も不測な事態に備え、学部執行部と派遣教育機関との連携を密にしながら臨機応変に対応できる体制強化をしていく。留学先での単位を取得した学生は、EAP: Study Abroad I, II, III (各4単位計12単位) と Academic Foundation: Study Abroad (4単位) の計16単位の認定を行うが、本年度QUTに留学した学生で1科目の単位取得ができなかった学生が数名生じた。それらの学生は学部講義を履修した比較的英語力の高い学生であったが、先方の大学で選択した科目の難易度が高かったことによりこうした問題が生じた。学部としては、300-400レベルの科目群のなかから学部で設定している必要単位以外に、追加で4単位を履修し、その単位を読み替えする形にすることとした。

③ カリキュラムツリーの提示

現行のカリキュラムをもとに、入学から卒業までの段階的な学びを提示したものを2022年度の履修要項に提示した。また履修科目等の事例をHP等に掲載していく。2023年度導入の新カリキュラムの策定においても、新カリキュラムに対応したカリキュラムツリーを作成して、履修要項や学部HPに掲載していく。またそうした資料はオリエンテーションにおいても、活用していく。

④ 卒業要件である英語スコアの達成

現在4名の学部専任教員が English for Academic Purposes と Academic Foundation の英語科目群についてレベル別にクラスを担当し、卒業要件である TOEFLiBT80 取得を目指し、集中的な英語力の強化を行なっている。4名の教員は定期的に学生一人一人の状況確認・協議を行い、きめ細かい対応を行っている。TAを採用しての Tutorial Session の設置、セメスターブレイク期間を活用しての集中講座も TOEFL スコア取得を目的に学部教員のもとで行われている。また Cross Cultural Understanding のクラスでは、英語レベル別ではなく、異なるレベルの学生や、外国人学生との交流も考慮したクラス編成を行なっている。その一方で入学当初から英語に問わず学生もいるため、今後も、英語担当教員のみならず、TA、アカデミック・アドバイザーも学生の動機付けを行なっていく。

⑤ 2023 年度カリキュラム改訂

2023 年度に導入される新カリキュラムの検討委員を学部長の指導のもと任命し、検討委員会で改訂案を作成し、教授会で集中的な審議をおこなってきた。また教務課の設定するスケジュールに沿って、学部の卒業要件、科目区分、科目特性、必要単位数の設定。履修制限・成績優秀者・早期卒業に関する条件、科目ごとの担当教員名、担当教員ごとのセメスター別担当科目数を作成した。国際教養学部は、開設時より、英語による人文・社会科学分野の幅広い学びと3年次からのゼミを中心とした専門性の強化を目指すカリキュラムを構築し、実施してきた。本学部の特徴である1学期の必修海外留学、卒業要件である TOEFLiBT80 の取得義務を今後も堅持しつつ、今回のカリキュラム改正では、SDGs、データサイエンスに関連した新たな科目群を提供し、多様なニーズに呼応したカリキュラム構築をコンセプトとした。今回の改訂のポイントは主に以下4点である。

- 履修者が少ない Seminar IV を廃止し、代わりに6名の教員が Freshman Seminar II 必修2単位)、9名の教員が Sophomore Seminar (選択必修2単位、4単位以上の取得が要件) が担当することとした。
- 2単位科目の新規設置することで他学部留学生も履修可能な、英語科目の選択肢を増やした。
- ゼミの学びを段階的に強化するため、Seminar I と II をインプットの時期と定め、Seminar III と Senior Paper を必修科目として設置した。これにより Junior Paper は廃止となった。
- 広く深い学びを更に推進するために Sophomore Seminar や 300-400 番台の必修選択科目の必要単位数を増やした。

⑥ 外国人学生の9月入学導入と日本語プログラム必修化

カリキュラム改訂のなかで Seminar I-III の必修化と、Seminar IV の廃止が決定したことにより、9月入学の学生の入学受け入れが可能になった。それによって、これまで入学のタイミングが合わず申請ができなかった学生を受け入れる形ができた。また、これまでは外国人学生は海外留学のプログラムと、日本語プログラムの選択が入学時にできたが、今後は日本に留学をすることのメリットを活かし、日本でのキャリア形成ができるように、外国人学生は日本語プログラムのみで受け入れることとした。受け入れは2024年度9月から実施する。

【3】2022年度の取組みの点検・評価と2023年度以降の方針

【2022年度の取組みの点検】

① 学位授与方針の学生への周知の必要性

春学期、秋学期のオリエンテーションを通じて、学部長より3ポリシーと各種講義との関連性について十分な時間を確保してアピールを行なった。一定の認識を学生はあることができたと思える。

② コロナ等、不測な事態への対応の必要性

コロナ禍にあつて、留学時期が大幅に延期されることによって、ゼミの実施がZoomを介して行うなどして対応することができた。

③ カリキュラムツリーの提示

新カリキュラムに対応したカリキュラムツリーの作成を行い、来年度の履修要項、学部HPに反映させた。

④ 卒業要件である英語スコアの達成

英語担当教員のササキ先生を中心に英語試験の把握を行い、その状況は定期的アップデートされ、卒業要件であるJunior Paperの判定を行う学部教員に共有されてきた。

⑤ 2023年度カリキュラム改訂

カリキュラム検討委員会、学部教授会、教務委員会、教育・研究審議会を経てカリキュラム改訂を策定し、完了することができた。

⑥ 外国人学生の9月入学導入と日本語プログラム必修化

入試委員会での審議を経て、2024年度9月からの外国人学生入学の受け入れを行うことが可能となった。

【今後の課題および2023年度以降の方針】

1. 卒業要件である英語スコアTOEFL-iBT 80の達成は、国際教養学部の学生にとって、大きな挑戦であるが、学部開設以来EMPでスタンダードな学位を授与する学部として堅持していく必要がある。4年間で卒業要件に達していない学生はいるが、今後も入学時より、オリエンテーションや学部科目履修を通じて、本要件の周知の徹底と、学部が提供している英語能力強化にむけたチュートリアル等の課題授業での各種サービスの活用を促していく。
2. カリキュラム改訂によって2023年度以降の学生は、Freshman Seminar, Sophomore Seminar, Senior Paperなど新規学部科目の導入に応じた学習が必要となっていく。学生の学習状況等や、負担をしっかりと認識していく必要がある。
3. 外国人学生を対象とした9月入学の導入と、日本語プログラム必修化によって、外国人学生の日本語能力がどの程度要請され、また長期的には、日本語プログラム履修者がどのようなキャリア形成を日本で行うことができるかもモニターしていく必要がある。

基準5 学生の受け入れ

- ・ 学生の受入のための広報活動、および学生の受け入れの適切性について、点検・評価を行っているか。
- ・ 受入れ制度ごとに学生の学習状況を把握し、点検を行っているか。

1. 学生の受入のための広報活動、学生の受け入れの適切性について

【1】2022年度の方針・改善計画・取り組み等（および中期的な改善計画）

<広報活動>

① オープンキャンパスにおける学部展示の充実

本年7月30-31日に実施したオープンキャンパスではAW606とAW607教室を使用して、初めて学部広報のパネルならびに関連資料を配置して展示を行った。学生自治会メンバー、教職員が協力し、具体的に学部を説明する機会となり、参加者からも良い反響があった。終了後、教職員で協議し、来年度3月に開催されるオープンキャンパスに向けてパネルの拡張と映像の活用を行っていく方向で、役割分担を明確化した。具体的には①映像、シラバス、教科書が連動しているような科目を<歴史・文化・社会> <政治・国際関係> <経済・経営>の3つの分野から2~3科目取り上げて学部の学びの多様性を分かりやすく説明していく。②学部が所有している映像を連続して見られるような教室をひとつ配置する。③学生自治会が企画している活動、国際学生寮の生活の様子、留学生の声、日本語プログラムの説明を追加する。④「卒業生の声」の充実が挙げられた。

② オープンキャンパスでの卒業生の活躍紹介

学部体験授業では学部でまなぶ現役生の話がとても好評であるが、実際に社会で活躍する卒業生にお話をしてもらい機会を提供することで、より学部に対する理解と学びの効果が上がることが期待できる。

③ 学部HPとSNSによる広報

学部HPやSNSへの広報活動は企画部に6月に異動した職員に大きく依存していた。それ以後、アップデートがされない状態が続いている。8月2日に行った教職員による協議会では、学部広報について教職員で協力して継続的な学部広報を進めていくことを確認した。

④ 外国人学生に対する広報活動の強化について

オープンキャンパスや学部HP、SNSは日本人学生を想定して行っているが学部の特性を考え、英語での広報を強化していくことを教職員で確認した。具体的には①オープンキャンパスにおける展示パネルの英語訳②学部HP英語版の強化につとめていく。また学部事務室のイニシアチブでオンラインによる個別入学案内を行うこととなり、本年度は1月30日、2月28日、3月21日に行う運びとなっている。

⑤ 関西創価高校への効果的な学部アピールについて

アメリカ創価大学、GCPが提供するプログラムや、現役生、卒業生の活躍に関する情報に比べ、国際教養学部の情報が不足しているため、アメリカ創価大学への進学から途中で進路変更をした学生の多くはGCPを選択している現在の状況を関西高の英語担当教員からお聞きした。英語で4年間の学習を段階的に深めていける点からすると一部生徒にとって国際教養学部は選択肢たりうるプログラムである。そうした意味からも機会を活用しながら、情報提供に努めていく。

<学生の受け入れの適切性>

パスカル入試

パスカル入試で入学した学生には国際教養学部独自の英語要件等を設定しているが、入学後、講義の内容に対する理解度に問題がある学生が数名いることが確認できている。高校からの推薦書、成績、LTD、面接という仕組みだけでは学力を担保できていないという問題があると思われる。今後こうした学生を事前に把握する方法をアドミッションオフィスとも協力しながら進めていきたい。

外国人学生入試

4月入学という制約や、長期にわたるコロナ禍の影響もあり定員数は満たされていないという状況が長期にわたって続いている。日本人学生に枠を移動するか、もしくは広報活動を活発化して積極的な学部広報を行うことで対応することが望まれる。

【2】2022年度の取組みの点検・評価と2023年度以降の方針

【2022年度の取組みの点検】

<広報活動>

① オープンキャンパスにおける学部展示の充実

学部事務室と学生自治会の協力を得て、第1段階としての学部展示を行うことができた。

② オープンキャンパスでの卒業生の活躍紹介

本年度はオープンキャンパスに卒業生を招いての広報活動はできなかったが、展示を通じて、卒業生の活躍を紹介することはできた。今後はオープンキャンパスの日程に合わせ事務室、教員、卒業生で連携をとって計画的に進めていく必要がある。

③ 学部HPとSNSによる広報

学部事務室の尽力により、大幅に学部HPの充実が図られた。卒業生の活躍、進路等で新規記事が掲載された。職員と自治会、学企のメンバーとの間で行われた意見交換会を通じて、HPの改修案、強調すべきポイント等について連絡があった。

④ 外国人学生に対する広報活動の強化について

学部HPの継続的なアップデートと、オンラインを活用した個別の学部ガイダンスの実施を通じて、外国人学生に本学部の魅力を継続的に伝えていく必要がある。

⑤ 関西創価高校への効果的な学部アピールについて

本年度は関西校からの申請人数が昨年度と比べ大幅に上昇した。関西校の英語教員との情報交換等も学生の申請人数の増加に一定のインパクトがあったと考えられる。来年度創価高校の教員と連携して国際教養学部独自の関西校学生との交流会を行う予定となっている。

<学生の受け入れの適切性>

2022年度のパスカル入試は募集人数を満たさない申請数となった。他学部と比べ申請条件が高いことが理由と考えられるが、適正な募集人数なのか判断は難しい。

【今後の課題および2023年度以降の方針】

<広報活動>

① オープンキャンパスにおける学部展示の充実

学部展示の基礎的な情報は提供できるようになったが、保護者や学生が知りたい情報となるよう

に、アンケート等を実施し、学生のニーズに沿った情報の提供と、学生自治会の学生と受験生、保護者の交流の機会を増やすような工夫をしていく必要がある。

② オープンキャンパスでの卒業生の活躍紹介

卒業生の活躍は、学部の重要な財産であるため教員、学部事務室、卒業生と連携しながら進めていく。

③ 学部 HP と SNS による広報

学部 HP や SNS を通じた学部情報の発信は、最も重要な広報活動であるが、企画、取材、校正の全てを学部事務室の担当者が担うことになっており負荷が高い。この状況を乗り越えるためには、持続性のある仕事の分担や、外部への委託といった抜本的な改革が必要であるとする。

④ 外国人学生に対する広報活動の強化について

学部 HP の継続的なアップデートと、オンラインを活用した個別の学部ガイダンスの実施を通じて、外国人学生に本学部の魅力を継続的に伝えていく必要がある。そのためのデータ等を整理、蓄積していくことが必要である。特にキャリアセンターと連携をとりながらキャリア面でどのような分野、進路が勝ち取れるかが外国人学生獲得にとって、今後重要であるとする。

⑤ 関西創価高校への効果的な学部アピールについて

年によって、国際教養学部への志望度が大きく変動するため、学園教員側との情報の共有や、ポイントについて継続的に伝えていくことが必要であるとする。

<学生の受け入れの適切性>

パスカル入試

現状 15 名という枠の中で優秀な人材が継続的に申請してもらえるような広報、オープンキャンパスが重要となる。

外国人入試

外国人学生を対象とした 9 月入学の導入と、日本語プログラム必修化によって今後申請者数が増えるかを注視していく必要がある。また長期的には、日本語プログラム履修者がどのようなキャリア形成を日本で、できるかもキャリアセンターと連携して推進し、またモニターしていく必要がある。

学生の意見聴取

- ・ 履修、授業、DP に関すること
- ・ 昨年度の学生からの意見聴取を受けて取り組んだ事項について
- ・ 学生生活アンケートから見える本学の傾向性について

【1】2021 年度の意見聴取をもとに実施した検討や取り組みの内容

<履修、授業、DP>

履修・授業

学部教授会で学部長より、第1回目の講義の際に当該科目が DP, CP の中でどのような位置づけにあるかについて明確化するよう学部教員に周知し、多くの教員が実施した。

授業

1, 2年次の科目では必修や、選択必修科目が多いため、講義時間外に、課題への取り組みや、授業内容をアシストする補講が重要な役割を果たす。1年次春学期に提供した Statistics I では2名の学生を SA として採用し、課題への取り組みや、プロジェクトペーパーの補助が行われた。また本年4月に追加的な補助を受け、授業中のアシストにも1名を配置することができた。こうした取り組みにより、Statistics I については、昨年度と比べ顕著な成績の上昇がみられた。

DP

DP と学部カリキュラムとの関係を機会あるごとに学部生に説明してほしいとの意見に対して、学部長がオリエンテーションの機会を活用して徹底する形を定着させた。

<意見聴取を受けて取り組んだ事項>

英語学習における学生の自己肯定感を高める工夫の必要性

4名の学部専任教員が English for Academic Purposes と Academic Foundation の英語科目群についてレベル別にクラスを担当し、卒業要件である TOEFL iBT80 取得を目指し、集中的な英語力の強化を行なっている。4名の教員は定期的に学生一人一人の状況確認・協議を行い、きめ細かい対応を行なっている。また Cross Cultural Understanding のクラスでは、英語レベル別ではなく、留学生との交流も考慮したクラス編成を行なっている。その一方で入学当初から英語につまずく学生もいるため、今後も、英語担当教員のみならず、TA、アカデミック・アドバイザーも学生の動機付けを行っていく。

国際教養学部設立時より演習への所属、Level300-400 の科目履修条件として TOEFL-iBT のスコアを基準としてきた。今期コロナ禍にあつて春学期の留学が実施できなかったため、2年次の学生を対象に暫定的に Level 300-400 の履修条件を TOEFL-iBT70 から 60 に変更した。今後も基本的にこの変更を維持していく形で検討している。なお卒業要件である TOEFL-iBT80 / TOEFL ITP 550 のスコアは維持していく。学生との面談では「TOEFL-iBT の勉強をすること自体は好きではないが、そうした目標が入学時より提示されることによって目標が明確となり学ぶことができる。」「同様の挑戦をしてきた先輩からの TOEFL 対策のアドバイスが非常に有益であった」との意見があつた。入学時は学習効果を考慮し、レベル別のクラス編成としているが、目標達成へのプロセス、試験対策のノウハウを丁寧に提供することで英語力を向上させる努力を学部として続けていく。本年も D. ササキ准教授が多くのオフィスアワーを設けて英語学習に問題を抱える学生との個別面談、夏休み、春休みを活用しての英語集中講座を提供してくれている教員の存在が本学部の強みである。

【2】2022年度の意見聴取を踏まえた2023年度以降の方針・改善計画（および中期的な改善計画）

外国人学生を対象とした日本語プログラム

現在日本語プログラムの専攻する外国人学生は、E0) General Japanese for Beginners 日本語総合入門（5コマ、5単位）と E1) General Japanese I 日本語総合 I（5 コマ、5 単位）を履修しているが、

入門は月曜日から金曜日の1コマに配置され、総合Iが月曜日から金曜日の2コマに配置されている。1年次前期には科目履修がしやすいように対応しているが、秋学期についてはPrinciple科目等が2コマに重なっており、履修上の弊害になっているようである。科目履修ですべてを満たすことはできないが、可能な限り教務とも科目配置の調整をしていく。また9月入学の実施を通じて、より多くの学生がEMPを履修しながら日本語能力を養成できるよう努力していく必要がある。

国内外大学院進学希望者への進路相談

学部開設以来、国内外の大学院進学を希望する学生が毎年数名いるが、現状は学部教員がゼミを中心に適宜指導を行っている。既に卒業生は、大学院に進学し、卒業後民間企業に就職した卒業生もいるため今後は、学生自治会と調整し、大学院経験者との懇談会の機会を提供していく。

国際教養学部学生による進路相談

キャリアセンターが1年次よりキャリア科目を提供してくれているが、卒業生を招いて多彩な進路を考える機会を提供することを学生自治会と教職員が協力しながら検討していく。

合理的配慮が必要な学生への対応

本年度国際教養学部には数名の合理的配慮が必要な学生が存在しているが、個々の学生に対する対応にはバラつきがあり、個々の教員の裁量によっていることが多い。今後、大学からのより詳細なガイドラインに沿って、学生課、教務課等の部署と連携しながら持続的に対応できる仕組み構築に協力していく。